

「となり町戦争」と「東海道戦争」

——知らない戦争のリアリティーを追う——

内田 友子

一、「悲鳴の練習」が想定すること

二年前の秋、下校中の小学生が誘拐され殺害されるという事件が、広島、栃木とたて続けに起こった。それを受けて全国の学校や地域社会ではすぐに町内パトロール等の対策が講じられ、防犯という観点から子ども向け携帯電話の開発が進んだ。そのような取り組みの一環として、学校で「悲鳴の練習」も始まった。とつさの場合に大きな声で周囲に助けを求められるようにと、子どもたちに「悲鳴」をあげさせるという練習がしばしばテレビのニュースで紹介されるようになった。当の子どもたちはといふと、普段は静かにしなさいと注意されるほうが（たぶん）多いだろうから、晴れて大声解禁というものの珍しさからか先生の掛け声に合わせ元気に「悲鳴」を張りあげていた。

その様子を眺めながら、妙な気持ちになつたことを記憶している。

この練習は、たとえば教室で机の下に潜り込んだり口をハンケチで押さえて校庭へ速やかに集合したりする練習とは明らかに違う。想定されているのは、意図を持つ何者かに誘拐され殺害され

るという事態だ。

画面に映し出される子どもたちの嬉々とした表情に釣られて、彼らが向き合つている事態のなまなましさをうつかり見過ごしそうになつていた。よくよく考えれば「悲鳴の練習」とは、またずいぶんとうす気味悪いものだ。

二、イメージする戦争

一〇〇五年に直木賞候補にあがつた三崎亜記「となり町戦争」^①は、目の前に展開される現実と、自らが立たされている事態とのちぐはぐさに終始戸惑つていい男の物語である。ある日突然、隣接する町との間で戦争が始まる。「僕」が住む町の「広報まいさか」でそれは知られ、原因も明らかにされないまま公共事業として淡々と進められる。ごく普通の会社員「僕」は、「戦時拠点偵察業務従事者」に任命されその戦争へ巻き込まれていくが、彼はいま自分が戦争に従事していることのリアリティーがなかなか掴めない。しかし「広報まいさか」の町の人口の動きを知らせる欄には「戦死者」の数が載るようになる。戸惑う彼に対し、役場職員の香西さんは次のように語る（傍線内田。以下同じ）。

「なんだか、ぼくがイメージする戦争と、まつたく違う形で、違う手順で戦争が行われているんですね」

「私たちには条例どおりの手順を踏んで業務を遂行するしか術はないんですよ」

「ただぼくには、この町がやつてている戦争つてものがまつたく見えてこないし、いつたい何のために戦っているのかも見

当がつかないんですよ」

「おっしゃることはよくわかります。過去の戦争が、私たちの記憶の彼方へと消え去つて久しい時間がたちました。役場の中にも実際に戦争を体験した、という人間はもはやおりません。ですから私たちそれぞれが、自分の持つていた戦争のイメージと、現実に自分たちで遂行する戦争のギャップに苦しみながら、現実の戦争の各場面に応じた対応を積み重ね、協議を重ねつつ対処しているのが現状です」

そう言う香西さんの言葉の中に、僕は苦しみを感じられなかつた。香西さんは、諭すように僕に語りかけた。

「戦争というものを、あなたの持つイメージだけで限定してしまうのは非常に危険なことです。戦争というものは、様々な形で私たちの生活の中に入り込んでいます。あなたは確実に今、戦争に手を貸し、戦争に参加しているのです。どうぞその自覚をなくされないようにお願ひいたします」

（「となり町戦争」38～39頁）

作者の三崎亜記は一九七〇年生まれ。「戦争のない、平和教育の中で戦争を否定されてきた私たちの世代にとつての戦争を書きたいとの思いが、湾岸戦争以来ありました。しかし私は戦争のリアルを書けません。そこで考えたのが、自分が戦争を描けないことを逆手にとつた物語です」（「西日本新聞」二〇〇五年一月六日）と創作の動機について語っている。また、次のようにも説明している。⁽²⁾

こんな奇妙な物語を思いついたきつかけは、湾岸戦争だった。テレビに映し出される光の下で人が死んでるのに、何のり

アリティーも感じないで映像をみている。「あの戦争については遠すぎて見えない、といいわけも出来る。では、身近で戦争が起きたらどうなのか。やはり見えない状況があり得るんじゃないのか。殺りくや血なまぐさい残酷なシーンをあって描かないことで、映像のスペクタクルか無機的なデータとしてしか戦争を表象し得なくなっている私たちの現実認識のあり方を皮肉つているのだ。

一九四五年以降この六十二年の間、戦争体験は繰り返し語られ、戦争をテーマとした映画もたくさん作られた。夏になればテレビで必ず特集番組が組まれる。そして、そのような語りや映像にすっかり慣れてしまった私たちの中に穿たれつつある陥穽に、この小説は焦点を定めている。

三、イメージが封じ込む現実

「となり町戦争」のほぼ四〇年前、筒井康隆は「東海道戦争」（「SFマガジン」一九六五年七月）で、東京と大阪との間である日突然始まつた戦争を描いた。ちなみに六四年には東海道新幹線（東京—大阪）が開業している。戦闘や血なまぐさい殺りくの場面が一切発生しない「となり町戦争」とは反対に、この作品では市民を巻き込む戦闘や流血のシーンがスラップスティック・コメディの手法によつて騒々しく展開される。

登場人物たちの身も蓋もないような暴言やブラック・ユーモアでもつてこの作品が辛辣に風刺しているのは、一九五〇年代後半から国内で台頭し始めたテレビというメディアだ。特に五九年の

皇太子（現天皇）成婚パレードの中継や六四年のオリンピック開催といった「イベント」はその普及に拍車をかけたとされ、「東海道戦争」はそのような背景を踏まえて発表された作品である。

東京と大阪が戦争を始めた理由について、主人公「おれ」は、テレビ局に勤める友人に詰め寄る。

「おれは椅子を引っぱってきて、彼の横に腰を据えた。「何故東京は、大阪を攻撃するんだ？」

「おれは椅子を引っぱってきて、彼の横に腰を据えた。「何故東京は、大阪を攻撃するんだ？」

「じやあ、何故大阪が東京を攻撃するんだ？」そう訊ねてから、おれはあわてていった。「東京が大阪を攻撃するからだなんて、いわないでくれよ」

「だけど、その通りなんだ」彼はいった。「そうとも。どうどうめぐりだ」

「なぜだ！ なぜだ！」

「怒鳴るなよ。つまり、そういう期待があつたからだ。戦争という事件への期待、そして、そういう事件を起こすことのできる、自分たちの能力についての期待だ」

「自分たちというのは誰だ？」

「大衆だ。あるいは事件を望む人間のすべてだ」

（中略）

「こんな時、何が原因か判るか？ 事件の当事者だつて、誰が行動の主体で、命令系統がどうなつてゐるかわからぬ時、市民が現実を正しく評価するのは不可能に近いんだ。どれもみんな仕組まれた騒動だ。擬似イベントだ」

「つまりお前は」おれがいつた。「大衆がニュースに餓えていて、マスコミがその需要に応えて、この戦争をでっちあげたというのか？」

「その通りだ」彼は答えた。

（東海道戦争）19～23頁

この作品のモチーフとして筒井が採用しているのが、ダニエルJ.ブーアステイン『幻影の時代—マスコミが製造する事実』（東京創元社、一九六四年十月）である。「擬似イベント」という言葉はブーアステインによるもので、「自然発生的でなく、誰かがそれを計画し、たくらみ、あるいは扇動したために起るもの」であり、「擬似イベントは、いつでもそつとは限らないが、本来、報道され、再現されるという直接の目的のために仕組まれたものである。それゆえ、擬似イベントの発生は、報道あるいは再現メディアのつごうのよいように準備される。擬似イベントの成功は、それがどれくらい広く報道されたかということによつて測られる」と説明されている。

「擬似イベント」が擬似として発生しながらも野次馬たちを巻き込んでなまなましい現実へとすりかわっていく様を「東海道戦争」はシニカルに描く。たとえば全編は十一章に分けられているが、その各章のタイトルとしてあてられた「スポーツ」「インポート」「マエコマ」「Aロール」等々の業界用語（？）は、異常な事態に翻弄される「おれ」の姿を、まるで正確に構成されたテレビ番組のように客観的に突き放す。またラスト・シーンで背広姿の「おれ」は手榴弾を片手に敵の装甲車へ突進するが、「手を振り上げたとき、装甲車の砲口が音なく輝き、衝撃があり、装甲車に向かつてなおも走つていくおれの首のない後ろ姿を、吹きとばさ

れたおれの首は「瞬見た」というように、「おれの首」はあくまで映像として印象的かつ効果的なカメラ・アングルを見出してしまいます。

関井光男はこの作品について、次のように解説する。⁽³⁾

筒井康隆の作品の過剰さがここにあるが、グラフィック革命以後のイメージの増大していく社会のなかで、これはまつたく新しい虚構の方法であつたといつていい。イメージが増大していくと、社会の輪郭は不鮮明になり、現実は卑小になつていく。イメージの真実しさが新しい価値として現実を封じ込めてしまうのだ。

この、イメージに封じ込められる現実、というのは、図らずも先の三崎が言う「映像のスペクタクルか無機的なデータとしてしか戦争を表象し得なくなつてゐる私たちの現実認識」という昨今の状況に脈々と通じてゐる。

四、探される「リアリティー」

「となり町戦争」と「東海道戦争」は作風も発表された時代背景もまったく異なるが、どちらの主人公も〈戦争〉に現に巻き込まれているにもかかわらず、リアリティーを獲得するため既存の「戦争のイメージ」をなぞらうとするという共通点があることは興味深い。

だけど……、だけど香西さんを癒すことはできないだろう。戦争を感じ取れない僕には、戦争の痛みを感じることもまた、できないのだから。

そして僕の中では、再び無声映画のようなモノクロの戦争シーンが繰り返される。戦車が砂塵をまきあげ、壊れた壁に隠れて歩兵が手榴弾を投げ、それがきれいな放物線を描いてモノクロの青空を行き交う、様式美を備えた戦争だ。

「ぼくにできることだつたら」

もう一度そうつぶやく。確かに僕はそう言つた。自覚も覚悟もないままに。〔「となり町戦争」 43～44頁〕

自分が何のためにこの空間にいるのかがわからなくなる。
〔略〕僕は僕の中のリアルを失う。僕は、今、何の、ために、歩いて、いる、のか。

「まず、五十、メートル、右に、曲がつて、三百、メートル、左に、曲がつて、三十、メートル」

一步踏み出たびに念佛のようにそう唱えていた。そうでもしなければ自分がここにいることすらリアリティを失つてしまいそうだつたからだ。いつか見た戦争映画のよう、この暗渠の先に光が広がる時を待つた。でもそんな戦争映画を見た覚えはなかつた。そう、僕は僕の中の普遍化された戦争のイメージを、今歩いているのだ。〔「となり町戦争」 109頁〕

中継車がやつてきて、武器の手入れをしている男たちに、テレビ・カメラを向けた。男たちは、掃除したばかりの銃を、もういちど磨きはじめた。

「ええ、ちょっと何か、うかがつて見ましょう」

アナウンサーがマイク片手に、男たちに近づき、二十五、

六歳の若者に話しかけた。

「恐ろしくは、ありませんか？」

「平気だよ」彼は短い煙草を横つちよにくわえたまま、小銃を磨き続けた。

「なかなか勇気のある方です。——ええ、あなた、この戦争をどう思います？」

「戦争は嫌いだけど」彼はわざと、ぶつきらぼうに答えた。
「でも、誰かがやらなくちゃね」アクション俳優の誰かの真似をして、煙草をブツと吹いて捨てた。

（「東海道戦争」36～37頁）

よしやつづけてやると思った時のおれはやはり、戦車の登場する戦争映画のシーンを、参考のために頭の中で反芻していた。背広のボケットに右手をつっこみ、手榴弾を握りしめた。畠の中を、装甲車めがけて走つた。できるだけ近づいてから投げつけてやろうとした。装甲車は砲口をこちらに向けた。おれは走りながら、歯で手榴弾の信管を引き抜いた。

（「東海道戦争」48～49頁）

「東海道戦争」では先にも述べたように、「おれ」はでつちあげられた擬似イベントの渦中へ巻き込まれていき、最後にはその大がかりなイベントの登場人物の一人と化して壮絶かつ印象的な構図の中で破滅していく。つまり、イメージと現実とのすり替えが完全に行われたところで作品は閉じられる。

一方「となり町戦争」では、結局「僕」は最後まで戦時下に自分がいたということのリアリティーに悩む。だが、「予定通り」

に戦争が終つた後の町を車で走つてその痕跡を探そうとするうちに、「僕」は別のリアリティー、言わば自分の中に巣食つている危険の手ごたえを、明確に得ることになる。

割れた窓、銃撃でえぐられた塀、焼失した家屋、そして戦死者の屍。血痕。何ものをも見落としたくはなかつた。不意に、あのおかっぱの男のコトバが蘇つてきた。

「トウサツは盗み撮りの盗撮じやなくつて、倒れると撮影で倒撮、戦死写真の撮影のこと。戦争楽しむのにも派閥があるつてコトですよ」

僕の中でそのコトバが繰り返された。僕は、彼のように「戦争を楽しむ」気はない。でも今、まるで間違ひ探しをするかのように、戦争の痕跡を探している。ある意味楽しんでいる自分と、それを戒める自分が存在する。まるで、事故や災害を特集したテレビ番組を、眉をひそめながらもわくわくして観てしまうように、自己の絶対的な安全性が確保された場所では、人の災難ですら娛樂になり得るのだ。

だが結局、戦争の痕跡はなんら見つけだすことができなかつた。僕は、あきらめてため息混じりに車を加速させた。

ため息が安堵から生じたのか、失望から生じたのか、僕自身にもわからなかつた。

（「となり町戦争」164頁）

六十余年をかけて築き上げられた語りと、それに基づく映像やイメージの上に立つ世代によつて今度は、戦争体験がないことがら生じる恐ろしさを語る、とでもいうべき語りの試みが胎動し始めている。

注

「となり町戦争」の引用は、『となり町戦争』（集英社、一〇〇五年一月）による。「東海道戦争」の引用は、『東海道戦争』（中央公論社、一九七六年二月）による。

初出は「小説すばる」一〇〇四年十二月号。第十七回小説すばる

新人賞。〇六年には渡辺謙作監督により映画化された。主演、江口洋介、原田知世。

2 「表現者の現場」（「YOMIRI ONLINE」
<http://www.yomiuri.co.jp/index.htm> 最終確認日一〇〇六年三月五日）

3 関井光男「作品への視点・筒井康隆の世界」（『國文學 解釈と教材の研究』一九八一年八月号）